

第3回 SPARC Japan セミナー2012

「平成25年度 科学研究費補助金（研究成果公開促進費）改革」

科学基礎論学会における 欧文誌刊行の現状と問題点

菊池 誠

(科学基礎論学会)

講演要旨

科学基礎論学会は1954年（昭和29年）に湯川秀樹（物理学）、末綱恕一（数学）、高木貞二（心理学）、下村寅太郎（哲学）らによって創立された科学の基礎に関する学会である。科学基礎論学会は哲学、物理学、数学、心理学、工学といった様々な分野の研究者が参加し、分野の垣根を超えた研究交流を続けていることに最も大きな特徴があり、1954年より邦文誌「科学基礎論研究」を、1956年より欧文誌「Annals of the Japan Association for Philosophy of Science」を刊行している。我が国において長年にわたって哲学系の欧文誌を刊行していることは珍しいが、欧文誌の刊行に関しては様々な問題を抱えているのも事実である。本講演では科学基礎論学会における欧文誌刊行の現状と改革への取り組みを紹介し、我が国において哲学系の欧文誌を刊行することの意義や価値、問題点などについて論じたい。

菊池 誠



1991年東京工業大学理学部数学科卒業
1993年同大学院理学研究科情報科学専攻修士課程修了
神戸大学大学院自然科学研究科助手等を経て、
現在、神戸大学大学院システム情報学研究科准教授
博士（理学）（東北大学1996年）
専門は数学（特に数学基礎論）と数理論理学の応用
Association for Symbolic Logic、日本数学会、科学基礎論学会、精密工学会、日本認知科学会
に所属
2011年より科学基礎論学会理事、編集委員長

今日は人文社会系の事例紹介ということでお話しします。私自身のバックグラウンドは数学で、純粋な人文社会系の研究者ではありません。ただ、私の専門は数学の中でも数理論理学や数学基礎論と呼ばれている哲学に非常に近い分野で、哲学の先生方と交流することが多く、哲学系の学会に参加しています。

それと、科学基礎論学会は分類すれば人文社会系に入りますが、典型的な人文社会系ではないかもしれません。人文社会系といっても非常に幅が広く、ほとん

ど理工系と変わらないような分野もあれば、フランス文学や英文学のような分野もあります。科学基礎論学会は必ずしも代表的な分野の、代表的な学会ではないかもしれません。また、私の話も学会の意見をまとめて集約して紹介するものではなく、どちらかというと私自身の個人的な考え方を紹介するものなので、そのことにご留意ください。

科学基礎論学会とは

科学基礎論学会は大変に由緒正しく歴史のある学会で、有名な湯川秀樹先生や末綱恕一先生、高木貞二先生、下村寅太郎先生が1954年に設立した学会です

(図1)。英語の名称は Japan Association for Philosophy of Science で、英語の名称と日本語の名称が若干ずれています。実は設立の際、物理学の朝永振一郎先生にも入っていただきたかったらしいのですが、朝永先生はお父さまが哲学者だったためか大の哲学嫌いだったので、学会名に「哲学」を入れてしまうと入っていただけなくなってしまうため、日本語の名称には「哲学」を入れなかったそうです。しかし結局、朝永先生には入っていただけず、意味がなかったと学会設立からのメンバーの長老の先生から伺ったことがあります。

この学会の特色は、哲学だけでなく、物理学、生物学、数学など、いろいろな分野の研究者が参加して、分野の垣根なく科学の基礎、科学の哲学や数学の哲学について議論することにあります。科学の哲学は哲学の一つの専門分野にもなっていますが、もちろん科学や数学の専門家自身もその議論に加わるべき問題であって、専門領域になった哲学としての科学哲学ではなく、もっと広い意味での科学の哲学を多くの人たちと一緒に議論することを目的として設立されています。しかし、実際に運営の中心となっているのは哲学者であって、哲学者が運営している学会に科学者や数学者

が参加しているような形になっています。例えば理事の半数以上が哲学者です。主な活動は、総会と講演会、いわゆる学会の大会を春と秋の年2回行うことと、和文の学会誌を年に2冊、欧文の学会誌を年に1冊刊行することです。

関連する学会としては、国際科学会議 (ICSU) という、日本の学術会議が属しているような大きな学会があります (図2)。その下部組織に The International Union of History and Philosophy of Science があって、さらにそれが歴史と哲学の部門に分かれて、The Division of Logic, Methodology and Philosophy of Science という集団の日本の一種のブランチのような役割を果たしています。科学基礎論学会はそこに委員を常に送り出しており、それも一つの重要な役割です。

日本国内の関連する学会としては、日本哲学会、日本物理学会、日本数学会などが挙げられますが、科学基礎論学会が自分のホームグラウンドになっている研究者はあまり多くありません。例えば数学者であれば日本数学会に属していて、主な研究活動はそちらで行っており、哲学について論じるときだけ科学基礎論学会にやってきました。物理学者であれば日本物理学会に属しています。それぞれみんな自分の居場所を持っていて、ここに出向いてきて哲学の話をするような感じですか。

また、哲学系の関連する学会に、日本科学哲学会や

科学基礎論学会とは？

- **英語名称**
 - Japan Association for Philosophy of Science
- **概要**
 - 科学の基礎および哲学に関する学会。
<http://phsc.jp>
 - 1954年(昭和29年)に湯川秀樹(物理学)、末綱恕一(数学)、高木貞二(心理学)、下村寅太郎(哲学)らによって創立。
 - 哲学、物理学、生物学、数学、心理学、社会科学、工学などの専門家が参加。会員数は約500名。
- **主な活動**
 - 総会と講演会(6月)、秋の研究例会(11月)の開催。
 - 学会誌(和文誌:年2冊、欧文誌:年1冊)の刊行。

(図1)

科学基礎論学会とは？

- **関連する学会**
 - 国際科学者会議 (ICSU), the International Union of History and Philosophy of Science, the Division of Logic, Methodology and Philosophy of Science
 - 日本哲学会, 日本物理学会, 日本数学会など。
 - 科学哲学会, 応用哲学会
- **学会誌**
 - 科学基礎論研究: 1954年より刊行。J-STAGE で公開。年2冊。
 - *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*: 1956年より刊行。CiNiiで公開。年1冊。

(図2)

応用哲学学会があります。科学哲学学会が設立されたのは科学基礎論学会よりは後なのですが、その設立に関しては勢力争いのような社会的な経緯や要因もあったようです。しかし、現在ではある種の区別がなされていて、科学哲学学会は哲学者の集団です。つまり、科学哲学学会は哲学の一つの専門領域としての科学哲学の学会であって、物理学者や数学者はほとんど参加していません。応用哲学学会は科学哲学学会に似ているのですが、哲学的な考え方や手法を用いて科学を議論することが科学哲学学会の目的であるならば、科学に限定せず、広く、いろいろな分野に哲学を応用することを目指すのが応用哲学学会です。ここも哲学者が中心となっています。

科学基礎論学会は日本語の学会誌として「科学基礎論研究」を1954年から刊行しています(図3)。これはJ-STAGEで既に公開していますが、2~3年は非公開で、一定期間を過ぎた後は完全に公開するという形にしています。「科学基礎論研究」には学会員でなければ投稿できません。

欧文誌の「Annals of the Japan Association for Philosophy of Science」は、1956年から刊行しているので長い歴史があります。これはCiNiiで公開しており、完全にオープンになっていて、刊行と同時に誰でもアクセスできます。投稿に際しては、学会員である必要はありません。年に1回発行しています。

私は去年から編集委員長を仰せつかっているのです

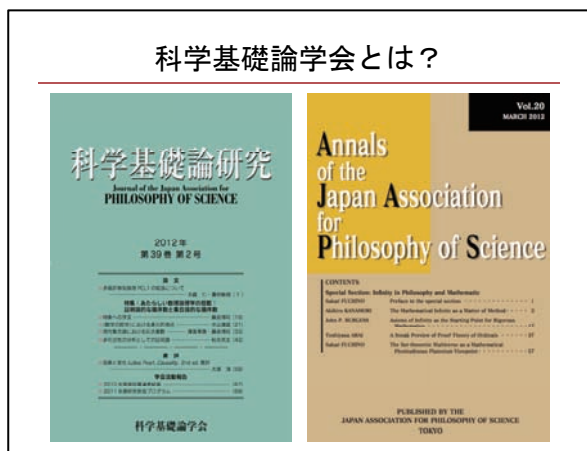
が、それまでは哲学の先生がずっと編集委員長を務められていました。学会誌刊行に関してはいろいろな問題点もあり、それを何とかしたい、もっといいものにしたという議論が学会で行われています。その議論の中から哲学出身でない人間が呼ばれることになったのではないかと考えています。

欧文誌刊行の問題点

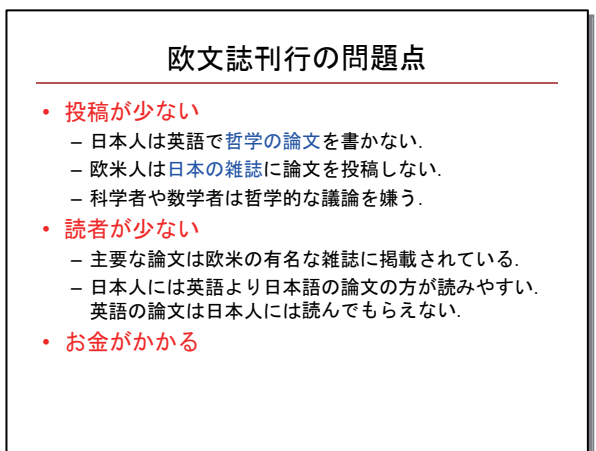
では、その問題点についてですが、言ってしまうと身もふたもないことなのですが、まず、最初に林先生が要約されていたことはほとんどすべて当てはまっています。そして、それ以外に三つの大きな問題点があります(図4)。

一つ目は、投稿が少なく、論文が集まらないことです。理由は簡単で、日本人にとっては英語で哲学の論文を書くのがしんどいからです。書かなければ生き残れないのであれば書くでしょうが、日本人の哲学者はみんな日本語で論文を書いていますから、その中でわざわざ英語で書く必要がありません。莫大な労力を掛けて、しかも、日本語で書いたものよりは不十分なものになってしまう論文を、わざわざ書こうとはしないのです。

また欧米人は、わざわざ日本の雑誌に投稿する必要がありません。欧米には一流、二流、三流とランク付けされたいろいろな雑誌があります。それならば、なるべくランクの高い、地元のいい雑誌に出そうと思う



(図3)



(図4)

のが当たり前で、哲学の世界から見たら離れた島国で出している訳の分からない雑誌にわざわざ投稿しようと思う人はいないし、そもそも雑誌の存在を知らない人がほとんどです。

それと、これも非常に大きな問題ですが、科学者や数学者は哲学的な議論を嫌います。科学者、物理学者や生物学者は非常に哲学的な問題意識を持っていて、面白いことを考えています。お酒を飲みながらであればいろいろな話を聞かせていただけるのですが、公の場所ではそれを発言することを控えられる方が多いです。最近は特にその傾向が強くなっています。なぜかという、哲学的な議論をする人は一種の際物のような扱いをされる習慣があって、哲学的な議論を始めると「数学者としては終わったね」と周りから見られてしまうからです。以前、上の世代の先生に「なぜ哲学の話をするのと皆にばかにされるのでしょうか」とお伺いしたところ、「数学ができなくなった人間が哲学の話をするからだ」とのお答えでした。しかし、逆は成り立ちません。つまり、数学ができなくなったら哲学や歴史に興味を持ち始めるのだとしても、哲学や歴史に興味を持っていることは数学ができなくなったことの証拠にはならないのですが、そうは考えないのです。

物理学でも、例えば量子力学が出てきたときに、今でも論争の続く非常に面白い哲学的な問題が提示されているのですが、世界中の若手物理学者はその問題に関する論争に参加するなど教え込まれてきました。物理学の先生にその辺の事情を講演していただいたことがこの学会でもあるのですが、物理学の世界では「哲学の論争をしていたら物理は進まない。そんなことは、例えばアインシュタインとボーアの二人に戦わせておいて、若手はそういうものにつつまを抜かさず一生懸命物理学の研究をすべきである」と考えられてきて、その伝統が脈々と受け継がれています。今でも若い人たちが哲学などに手を出すと「あいつは変なやつになってしまった」と言われます。だから、この学会にもあまり来たがらないのです。先生が来ていれば安心し

て来られるのですが、立派な科学者の学生が行くと、多分「変なところに行くな」という雰囲気になるのではないのでしょうか。

二つ目の問題点が、読者が少ないことです。いい論文がたくさん載れば読者も増えるのですが、いい論文は一流の雑誌に行ってしまう。それは致し方ないことです。では、日本人は読んでいるのかというと、学会員でさえ欧文誌はきちんと読んでいない気がします。なぜかという、われわれは日本人であり日本語を使っているからです。哲学のようなややこしい話を英語で議論したり読んだりするのは大変なのです。ましてや日本人の書く訳の分からない英語は、日本人であっても読みにくいですから、英語で書かれた論文は、何か面白そうな議論をしているという感想だけで置いておかれてしまうような気がします。私も頑張って英語の論文をこの雑誌に書いたことがありますが、誰からもコメントをもらえませんでした。外国人はそもそもこの雑誌の存在を知らないのです、読んでもらえません。

そのくせ、出版するにはお金がかかります。科学基礎論学会は、学会の運営経費を学会の会費から出しています。会費の3分の1が事務経費、3分の1が学会・大会の開催経費に使われ、残りの3分の1は出版の経費に充てられています。かつては出版の経費がもっと多く、財政を圧迫していたらしいのですが、いろいろ努力して、TeXによる入稿を進めることなどによって編集にかかる費用を大幅に削減することができ、今のところ赤字を出さずにトントンのところでやっています。

欧文誌刊行の意義

このような問題点があると、一番簡単な解決策は「やめてしまえ」ということです。書きたい人がいなくて、読みたい人がいないのなら、出さなければいいというのが単純な結論です。雑誌を出せば雑用もたくさんあり、文句を言う人もたくさんいるので、やめてしまったらどんなに楽かとも思います。しかし、個人

的にはやめるべきではないと思っていますし、多くの人もそう思っていると思います(図5)。

では、なぜやめるべきではないかという点、まず、「言葉の壁」という哲学に固有の問題があります。どれだけ優れた内容の論文を書いても、日本人の書いた英語の論文が海外の雑誌に掲載されることは極めてまれです。

私の近くの学生が哲学的でない結果を出して海外の雑誌に投稿したことがあります。笑ってしまうくらい即座にリジェクトの返事が来ました。明らかに読んでいないのです。リジェクトの返事も、レフェリーレポートが付いておらず、「この雑誌には大変たくさんの投稿があるので、すべての論文を載せることはできない、故にリジェクトする」と書いてあるだけでした。恐らくそれは実情なのでしょう。世界のトップレベルの雑誌には、哲学に興味のある世界中の人間が腕試しとして論文を投稿してきて、処理しきれない状態になっているのだと思います。その結果、読むに値することが初めから分かっている名前を通った研究者や、その周辺にいる研究者の論文しか読まれないということがまことしやかに言われています。例えば外国人が日本の雑誌に、日本語で哲学の論文を投稿してきたとしても、「てにをは」がぐちゃぐちゃな、小学生が書くような文章であれば、日本人は読まないでしょう。それと同じことをされてしまうということです。

では、日本人の哲学者が考えているものは読むに値

しないものしかないのかというと、きっとそんなことはありません。従って、出せばいいのです。たとえ英語がたつたなくても面白いと思う人はいるかもしれないので、それを出す場は何としても確保しておきたいし、英語のレベルが低いという理由だけでリジェクトされない雑誌を欧米圏で出してもらえないのであれば、日本ですべき必要があるでしょう。日本に限らず、中国や韓国など、アジアのほかの国でも同じような事情があるのではないかと想像しています。

また、もう一つの理由は、発表する場が必要だということだけではなく、発表することによって研究の内容そのものが変わるだろう、それが必要だろうということです。日本語で論文を書く限り、欧米の研究者と日本の研究者の間に対話は成り立ちません。もちろんこちらが出向いていけば話すことはできるし、彼らと呼んでも講演してくれますが、論文の形で論争を繰り広げなければ、ある意味で一方通行なのです。

欧米で出てきた有名な一流の論文や本に日本語で注釈を付けるのは、テレビを見ながら批評しているようなもので、こちらで批評していることは先方には絶対に伝わりません。それは残念なことでもあるし、悲しいことでもあると思います。そうではなく、こちらが発言した内容を実際に向こうの人に聞いてほしいのです。聞いてもらえれば、われわれは面白いことを考えていけば向こうの考え方が変わるかもしれないし、今まで設定しなかったような新しい問題が浮かんでくるかもしれません。さらに、聞いてもらうことによって、われわれの考え方もどんどん進んでいくかもしれません。そういう対話の場をつくる必要があります。

それから、哲学と科学や数学がほとんど離ればなれになっているのは、日本固有の状況です。哲学や科学の中心から見ると、日本は今でも田舎なのだと思います。田舎だと特化します。数学であれば数学のある特殊な問題を解くことに特化し、哲学であれば哲学のある問題に特化します。それと比べると西洋、アメリカやヨーロッパではすそ野が広く、数学のことを本当によく分かっている哲学者もいるし、哲学の問題を真剣

欧文誌刊行の意義

- **言葉の壁を破る**
 - 哲学の論文には高い語学力が要求される。
 - 非欧米圏の研究者が、研究内容を英語で公表できる場が必要。
- **対話の促進**
 - 日本語で論文を書く限り、対話は不成立。
 - 対話が成立することで、研究そのものが変化。
 - 科学者と哲学者の対話が必要。
- **主体的な主題の設定**
 - 国や地域によって問題は異なる。
 - 我が国に固有の問題や価値観のもとで主題を設定しうる国際的な雑誌が必要。

(図5)

に考えている数学者も大勢いて、そういう人たちの議論の中から新しい数学、新しい哲学が生まれてきます。日本における専門分野のトップは、欧米に引けを取るところか、それをしのぐいい成果を出しているのですが、すそ野の部分がすかすかになっています。それが仕方がないことであれば、例えば、数学が分かる海外の哲学の先生と日本人の数学の先生が議論したり、海外の哲学が分かる数学の先生と日本の哲学の先生が議論する場があれば、状況が変わってくるでしょう。

また、主体的な主題、話題の設定が必要です。昔から言われていることですが、どうしても流行を追いがちで、はやったものを輸入してその研究を進めるといいう形になりがちなのですが、国や地域によって問題は異なります。中心地から見たらなぜそんなことにこだわることなのか分からない問題や価値観の下で議論することが、世界全体から見れば学問の多様性になります。それは、われわれが単に自己主張するというだけではなく、哲学、数学、科学全般にとって非常に価値のあるものになるでしょう。その主体的な編集、主体的な内容の選択は、欧米の一流の雑誌にチャレンジして通すということだけを目指している限り生まれてきません。従って、日本人が編集するというだけではなく、日本人が中心となって積極的に「こういう話題を議論してみたい」という場をつくる必要があります。

これらは科学基礎論学会で欧文誌をどうしようかと議論したときに出てきたものです。こういう理由があ

るから「欧文誌をやめてしまう」という選択肢はあり得ません。今のところ、苦勞してでも出し続けようということになっています。

改善策

しかし、現状としては書く人がいない、読む人がいないではどうにもならないので、何か変えなければいけません(図6)。3年ほど前から、今までのようにただ書いてくれるのを待つだけではなく、学会の活動そのものとリンクした形で雑誌の編集を行っていく必要があるのではないだろうか、という提案がなされるようになりました。

そして、まだ試行ですが、海外における数学と哲学の研究者を招聘してシンポジウムを開催しました。シンポジウムというのは今までも毎年、総会と講演会のときに学会の中心が企画を立てて開催していましたが、これまでは日本人の研究者を中心として「今回はこの大学のこの先生にやっていただきましょう」という形で開催していました。そうではなく、テーマを定め、そのテーマにふさわしい海外の研究者を招聘して開催するシンポジウムです。そのシンポジウムには日本人にも参加してもらい、提題して議論してもらい、それに基づいてそのテーマの特集を設定して、その特集を刊行しました。

先ほどお見せした表紙は、そのように開催したシンポジウム“Infinity in Philosophy and Mathematics”の特集を掲載したものです。ただCall for Papersをホームページに掲載したりメールで流したりするだけではどうしても論文は集まらないので、投稿してくれそうな日本人や海外の研究者に個人的にお願いしました。その結果、この号では海外の研究者から2本、国内の研究者から2本の論文が掲載されました。数だけを自慢すると情けない話になりますが、それまでこの雑誌には投稿してくれなかったアメリカのプリンストン大学の一流の哲学者が、このシンポジウムには参加していませんでしたが、このシンポジウムの話を同僚から聞いて論文を投稿してくれ

改善策
<ul style="list-style-type: none"> • 「特集」の充実 <ul style="list-style-type: none"> - 海外の研究者を招聘してシンポジウムを開催. - シンポジウムを中心に特集を企画. 例: <i>Annals of the ...</i> Vol.20 (2012) <ul style="list-style-type: none"> 特集「Infinity in Philosophy and Mathematics」 - 2010年に開催した同名のシンポジウムが基礎 - 海外研究者から2本, 国内研究者から2本 • 日本における研究の紹介 <ul style="list-style-type: none"> - 日本における研究活動, 日本語の出版物の紹介. - 日本語で書かれた重要な文献の英訳の掲載. 翻訳が著者と訳者の対話を促すことも期待.

(図6)

ました。

前年も同様にシンポジウムに基づく特集を組みました。そのときは日本人の論文はなく、海外の研究者の3本の論文が掲載されました。そのときは極めて質が高く、専門性の高い論文を掲載できました。その論文は専門家の間ではかなり驚きの結果だったらしく、その分野の専門誌に出さないと読者がいなくて社会的にまずいのではないかと同僚に言われたことがあります。電子化されていると説明したところ納得してもらえました。

ただ、海外の研究者を招聘すればお金と手間がかかります。このときには、まさにその分野を研究課題としている人の科研費研究の一環として開催できました。協力してくれる人や、運良くそれを研究するための費用を持っている人が近くにいないければ、こういうものを開催することはできません。従って、このテーマが大事だから、ということでは定期的に開催することができないのです。また、シンポジウムを開催して研究者を招聘すると何週間か拘束されて、手間もかかってしまうという問題もあります。

それと、基本的に雑誌は原著論文を掲載すること、オリジナルのペーパーを出版することが目的です。しかし、日本で欧文誌を発行することの意義として、必ずしも原著のペーパーにこだわる必要はなく、とにかく魅力のある雑誌、価値のある雑誌を目指すべきです。価値のある雑誌にするためには、オリジナルでなくても日本語で書かれていた論文を翻訳して掲載することはとても重要なのではないかと考えています。それは大きな情報の発信なのではないかと考えています。

例えば、数学の先生は英語でも日本語でも教科書を書きます。そして、英語で書かれた教科書は世界中の人の目に触れますが、日本語で書かれた教科書は日本人の目にしか触れません。そして日本語で書かれた教科書の中にもとてもユニークなもの、価値のあるものがあります。海外の研究者と話をしていたときに、世界的に有名な先生が日本語で書いていた本を紹介したところ、仰天して内容を詳しく聞かれた経験もありま

す。

また、アメリカの The Association for Symbolic Logic という記号論理学会、論理学の親玉学会のコミッティーがやって来て、英語以外の言語でどういう本が出版されているかを調べて掲載するようなプロジェクトを立ち上げたいと思っているので、もしも立ち上がったなら日本の紹介をしてくれないかと頼まれたこともありました。結局はそのプロジェクト自身がつぶれてしまったので何もなかったのですが、需要はあるということです。日本の中である種のテーマを設定してシンポジウムを行うこともあります。日本では何に興味を持たれていて、どのような活動がなされているのか、どのような本が出版されているのかを紹介することは、十分に価値があることでしょう。

科学基礎論学会の欧文誌でも、かつては「ここ10年間の〇〇の日本における研究動向」といったサーベイのようなものも掲載していたのですが、手間がかかり、利害が衝突するので大変に難しいです。そのようなサーベイではすべてを網羅することはできないので、取捨選択がなされます。すると、落ちてしまった人は怒ってしまいます。そのサーベイ自身が研究に対する一種のレフェリーのような役目を果たしてしまう可能性もあるので、とても注意深くやらなければなりません。そうすると非常に手間がかかり、もちろんコストも掛かります。

また、例えば代表的な日本語で書かれた論文を英訳するとき、もしくは海外の論文を日本語に訳すとき、大概の場合、訳者と著者の間で大きな議論が交わされることが多いです。翻訳しようとするという意味不明な部分がどうしても出てきて、無理やり訳の分からない日本語訳を当てはめて終わりにしてしまう人もいますが、そうでなく、ここはこういう意味で合っているのだろうかと著者に問い合わせることも珍しくありません。ですから、翻訳をするという作業が、ベテランの著者と、若手の翻訳者間で対話を促すことにもなるのではないかと考えています。

特集を充実させて質の高いオリジナルペーパーを集

め、現在・過去の日本での研究活動を海外に紹介しようとすると、科学基礎論学会の中だけでやるのはかなり無理があるため、関連する学会と協力する必要があるだろうと考えています。今は三つのレベルが考えられています（図7）。

一つ目は、専門分野が非常に近く、また構成メンバーのオーバーラップもある日本科学哲学会と日本応用哲学会との連携です。事務的な仕事は科学基礎論学会が引き受けるので、シンポジウムの開催や論文の翻訳など、学術的な内容に関して協力してほしくないかと呼び掛けています。完全に同じ学会ではないので通るかどうかわかりませんが、「雑誌を変えていこう」ということで呼び掛けています。

二つ目は、少しハードルが高くなってしまっていますが、科学、数学、心理学、社会学など、関連する分野の母体となっている学会とも連携できたらいいと考えています。具体的には日本物理学会や日本数学会です。これらの学会で非常に面白い哲学的な議論を展開している人は、単なる一般の読み物を越えた面白い内容を含んでいる単行本や新書を書いているにもかかわらず、科学基礎論学会に参加していません。参加する意義を認めていないのだと思いますが、そういう人たちをたくさん抱えている学会とシンポジウムを共催することによって、そうした学会の本流にいる人と議論を交わせるようになったらいいと考えています。

三つ目は、海外の学会との連携です。具体的には韓

国や中国など、欧米よりはむしろ近くの国と連携が取れないだろうかと考えています。例えば韓国の学会で、アジアでの科学哲学の百科事典のようなものを作るときに、日本でどういう取り組みがあるのかということを紹介する著者を推薦してほしいという問い合わせが来ることがあります。欧米でないところから情報を発信しようとする動きは、日本の中だけではなく、近くの国でもあるので、そういう学会と連携することによってもう少し違った価値のあるものができるのではないかと思います。

それから、そのために何が必要かというところ、お金がかかります。今のところ、お金がないから出版ができないというわけではなく、学会全体が赤字でこのままではいけば3~5年後に破綻する、という状況でもありません。しかし、余裕がないので新しいことが何もできないのです。誰かの協力を仰ぐ必要があり、今のところ個人的に何とか手伝ってもらえないかと話しているレベルです。

例えば雑誌の発行に関する費用の補助を受けることができれば、浮いたお金で雑誌に良い論文を載せるための企画を立てることができるでしょう。シンポジウムの開催そのものは雑誌の発行事業ではないので、助成の対象とはならないでしょうが、その学会の活動のアクティビティが高くなることによって、結果として雑誌の質が良いものになっていくのではないかと考えています。

また、若手の哲学者は悲惨な状況にあり、極めて優秀な哲学者でも職がありません。ポストドクを何年か続けて特別研究費などをもらうことはできますが、もらったところで将来の見込みはないのです。そこで、今までの翻訳は常に手弁当だったのですが、学会から依頼する形で翻訳をする若手に翻訳料を出すことができれば、奨学金のような役割を果たし得るのではないのでしょうか。翻訳作業は、担当した若手研究者の研究内容そのものにも貢献するので、それが経済的な援助にもつながれば素晴らしいことです。

このように、もしも学会が財政的な余裕を持つこと

改善策

- **関連する学会との連携**
 - 日本科学哲学会、応用哲学会との連携（シンポジウムの企画運営、翻訳論文および翻訳者の選定など）
 - 関連する科学・数学・心理学・社会科学などの学会との連携（シンポジウムの共催等による科学者と哲学者の対話の促進）
 - 韓国、中国や欧米の学会との連携
- **財政的裏付けの確立**
 - シンポジウム開催の経費（旅費、滞在費）
 - 翻訳料、原稿執筆料

(図7)

ができれば、いろいろな企画を立てて取り組むことができるのではないかと思います。英語の論文を書いてくれるのは若い世代です。今でも投稿してくるのは20～30代の若い哲学者が多いので、彼らのアクティビティがどんどん高くなっていくことによって良いものにしていくのではないかと考えています。

それから、山下先生のお話を伺って雑誌のプロモーションの重要性を感じました。最近、科学基礎論学会でもそれについて話をしている、この分野であれば、科学基礎論学会が日本のブランチを担っている The Division of Logic, Methodology and Philosophy of Science の、数学の ICM に相当するコンGRESSが3年に1回、ヨーロッパで開かれています。昨年フランスで、その前は中国でした。学会のかかわり合いからすれば、アジアでは最初に日本が引き受けてほしいと個人的には思っていたのですが、中国で開かれました。そのコンGRESSで、去年はわれわれの雑誌を配布しました。私は予算と時間の都合があって行かなかったので、仕方がなく雑誌を向こうの会議の偉い人に宅急便で送ってお願いしたところ、どこかに置いておいてくれたそうです。会議に参加した人によると、たくさんの方が持って行ってきてくれたようで安心しました。これは何もない状況の中、手探りで、とにかく何もしないよりはましだと思ってやったことなのですが、もっとシステムティックにやればさらに効果的にできたのだらうにと、山下先生のお話を伺ってうらやましく思いました。

雑誌を出版するのに紙で印刷すると、莫大なお金がかかります。理事会でお金がないという話をすると、今はITの時代なのだから紙で出版するなおっしゃる先生方もいますが、紙で出版することには大きな価値があると思っています。その一番大きな理由はプロモーションです。URLだけが書いてあってもアクセスしませんが、ものが置いてあったら手に取り、少し暇があればめくりまわります。つまらなかつたらそれで終わりですが、面白ければ目に留まります。しかし、紙をそこに置いておかないと、その機会が失われてしまい

ます。その損失は大きいだろうということで、紙媒体の出版はお金がかかっても続けようという話をしています。

電子化に関しては、何年前かにオープンアクセス化したことによって、投稿される論文の質が明らかに変わっています。名もない人はインパクトファクターの高い雑誌に載せて自分の価値を高めなければいけません。けれども、エスタブリッシュした人であればそんなことは関係ないのです。誰が何を言っても、世界一だったら、世界中のどこの雑誌に論文を載せようがみんなが見に来ます。そういう人は、むしろわれわれの雑誌に論文を書いてくれます。その人たちが書いた論文がオープンアクセスでなければ埋もれてしまい、世界的な損失になってしまいます。インターネットで公開され、名もない雑誌であっても探せば出てくる状況であれば、論文を出版することの意義はあるし、そういう人たちが論文を書いてくれるので、非常に大きなことではないかと思います。

◆

(Q1) 私どもの MOA 健康科学センターは助成をしているので、非常に共鳴することもあります。私の専門は理系ですが、哲学会や科学基礎論学会の会員になっていて、よく実情は知っているのですが、科学、哲学、心理学といったたくさんの分野が来ています。基礎論学会の方は、確か去年度までなら、この関係する学会は編集委員という肩書きの方もおられますが、海外の方が一人もおられなかったと思うのです。それで査読などをどのようにしているのでしょうか。私どもは健康や医学全般を扱っているので、今後もし科学基礎論学会が大きくなれば、科学全般の哲学の部分の部分を扱うわけですから、具体的に大きな問題になるのではないかと思います。

(菊池) それはまさに今、議論されていることです。査読に関しては正直なところ、かつてはほとんどすべ

て日本人が行っていました。しかし、ここ3~4年の間に随分状況が変わってきて、海外の研究者に査読をお願いしています。そして、論文を執筆していただくことよりも査読をしていただくの方が大変だと分かりました。「論文を投稿してください」と頼むと一流の研究者でも投稿して下さいますが、「査読をしてください」と頼むと見事に断られます。査読は、日本人がやろうと外国人がやろうと、持ち出しの雑用というか、非常に手間のかかる仕事であって、後回しになってしまうようで、査読者を見つけることは非常に苦労しています。それでも、まだ割合は高くないのですが、ここ2~3年、海外の査読者を増やしてきています。特に海外の研究者が投稿してくれた論文であれば、海外の査読者は比較的引き受けてもらえます。

編集に関しても随分議論されています。編集委員に外国人の研究者を入れることは、雑誌の認知度を上げるという意味で、また雑誌の信頼性を高めるという意味でも重要であろうと考えています。

例えばシンガポールで10年ぐらい前に、数理論理学に特化した新しい雑誌が発行されたことがあります。その雑誌は、編集委員に欧米の一流研究者をそろえることによって、出版と同時にトップのジャーナルになることに成功しています。有名な名前が入っていればいいというわけではないとは思いますが、欧米の研究者に編集委員に入っていただくことも検討しています。ただし、どれだけ入ってもらうのか、どの分野で入ってもらうのかという具体的な話になると、話がなかなか先に進みません。ただ、特集を組んだりするときにゲストエディターの形で海外の人に入ってもらうことはもっと簡単にできるのではないかと考えているので、そういう方法もあるかと思えます。

また、学会自身が何か改革の案を出しても、やはり考え方はいろいろなので、なかなか先に進みません。もっと極端に言えば、雑誌の名前を変えてしまえという提案を出したこともありました。「Annals of the Japan」ではなくて、もっと最初から世界を目指す雑誌にするために雑誌の名前を変えることを提案し、時

の理事長には賛成されたのですが、50年以上ある名前を変えるのはもったいないという意見もあって変わっていません。

今回の科研費の改革に申請するという事は、学会内に対してもかなりインパクトがありました。今まで躊躇していた人たちにも、「これに出すのだから変えよう」と説得する。関連学会との協力でも、今までだったら協力しようと言っても腰が重かったのですが、今は前向きに協力してもらえる効果もあるかと思っています。